

「母さん無理だよ」

テロとの戦いと

米兵

第2部 疲弊する兵士

「再びイラク」苦に25歳自殺

「従軍を命じる」。07年秋、米軍から届いた一通の手紙に、米ワシントン州フルマン市に住む米陸軍兵ティモシー・ジョーンマンさん(当時25歳)は、目を疑った。翌年7月、イラクに再び従軍するよう求められたのだ。イラクでの駐留を終え、地元のワシントン州立大で障害者教育について学び始めたばかりだった。2年間は兵役がない予定だったが、人員不足の米軍は再従軍を命じたのだ。

「母さん、またイラクに戻るなんて無理だよ」。もともと除隊を考えていたティモシーさんは、同州トレドに住む高校教師の母ジャ

PTSDの診断残し



「イラクに戻りたくないと話していた」。長男ティモシーさんの写真を手に語るジャクリンさん
＝ワシントン州トレドで、4月

クリンさん(49)に落ち込んだ様子で電話をかけてきた。「戦場での具体的な話はしませんでした。戻るのは本当につらそうでした。母は振り返る。3人兄弟の長男。未婚の母ジャクリンさんに負担をかけず、軍に負担をかけるのが見つかったと

クリンさん(49)に落ち込んだ様子で電話をかけてきた。「戦場での具体的な話はしませんでした。戻るのは本当につらそうでした。母は振り返る。3人兄弟の長男。未婚の母ジャクリンさんに負担をかけず、軍に負担をかけるのが見つかったと

の奨学金で大学に進学するため02年、陸軍に省病院によると、イラクで武装勢力による1兵役に就いた。再従軍E D(即席爆発装置)攻撃を受け、帰還後、外傷性脳損傷(TBI)と心的外傷後ストレス障害(PTSD)と診断されていた。死の2カ月前にも自殺を図り未遂に終わっていた。

病院はその後、自殺の危険性のある帰還兵が診察に現れなかった場合、家族に電話を入れるなど規則を見直した。「息子は病気の症状を抱えながら、進軍と再従軍を両立させようとして頑張っていた。私は何もしてやらなかった」。母はそう言って、涙でほおをぬらした。

んは病院に抗議したが「フライバシー保護のため」と反論された。その後報道で、過去4カ月間に同じ病院で治療中の帰還兵6人が自殺していることがわかった。

「フライバシーを言い訳にした責任回避だ」。ジャクリンさんは地元選出の民主党上院議員に手紙を書いた。議員は米連邦議会で病院の対応を批判した。

「米ワシントン州で大治明子、写真も」

01年10月に米軍が始めた対テロ戦争は、既に8年目。戦場の長期化で疲弊する米軍の実像を検証する。

＝ワシントン

治療中再従軍

「イラクに戻れる状態ではありません」。米西部コロラド州の陸軍基地で再従軍を命じられた同軍兵士、タニエル・アルバーさん(24)は、軍医に訴えた。だが医師は「君は十分に回復しているよ」と繰り返すだけだった。

脳損傷(TBI)と診断された。激しい頭痛とめまい。睡眠薬や精神安定剤の処方を受け治療を続けたが治らな

い。除隊を決議し、その日が翌月に迫った07年10月、突然、再従軍を命じられたのだ。

米軍には「国防上必要」と認められる場合、兵士に除隊の延期を命

じることができるとの規定がある。イラク戦争長期化による兵員不足が原因だ。拒否すれば懲戒除隊として扱われ、異字名や医療保険、住宅ローンの融資を受ける権利も奪われる。「これまでやってきたことが無駄になってしまっ

た」。アルバーさんは06年12月にイラク従軍から帰国。戦場では武装勢力による手製爆弾(IED=即席爆発装置)攻撃を5回受け、帰国後、爆風の衝撃で脳細胞が破壊される外傷性

住宅ローンの融資を受ける権利も奪われる。「これまでやってきたことが無駄になってしまっ

た。同じ部隊で再従軍した兵士4人もTBIは「愛国心と経済的な自立のため」。除隊後は「消防署の救急救命士になって人の命を助ける」という夢もある。

再従軍ではデスクワークを任せられたが、頭痛、目の眩暈、訓練中に発作を起

生活のため拒めず



「薬は飲みたくないのだけれど、症状がひどくなるのでやめられない」と話すアルバーさん。後ろは買ったばかりの自宅—米西部コロラド州コロラドスプリングスで

えながらの勤務になっ

た。同じ部隊で再従軍した兵士4人もTBIは「愛国心と経済的な自立のため」。除隊後は「消防署の救急救命士になって人の命を助ける」という夢もある。

米国の戦い

第2部 疲弊する兵士

米国の戦い

◎

軍事法廷は回避 元米兵に近く判決

「戦闘で心神耗弱」どう判断

グリーン被告は陸軍兵としてイラク駐留中の06年3月、バグダッド南方のマハムディアで、同僚の米兵4人と民家を襲い、アベタール・バシム・ジャナヒさん(14)を強姦して殺害したほか、ジャナヒさんの両親と妹(6)を殺害した。

同被告以外の元米兵は軍事法廷ですでに禁固27カ月〜110年の判決を受けている。同被告については、軍事法廷が「心神耗弱」を理由に裁判を回避した。

しかし、連邦検察当局は被告に責任能力があるとして、同被告が所属した部隊があるケンタッキ

イラク駐留中に強姦殺人

【ニューヨーク小倉孝英】イラクに駐留中の06年、少女1人をレイプし、この少女を含む家族計4人を殺害したとして強姦殺人罪に問われた元米兵、ステイファン・ダレ・グリーン被告(23)に対しケンタッキー州パドックカの連邦地裁陪審(12人)は21日にも、判決を下す。これを受け近く判決が言い渡される。外国駐留中の兵士による罪を一般法廷が裁くことは珍しい。厳罰を求める評決が出ると思われる。

州で起訴、今年4月27日から裁判が行われていた。陪審は今年7月、有罪の評決を下した。その後、死刑か保釈の可能性のない終身刑かについての公判が続いていた。

検察側は「被告はレイプと殺人を計画し、犯行後、祝福までした」と主張し死刑を求めている。一方、弁護側は、同被告がイラクでの任務によって心神耗弱状態にあったとし、「米国は(精神的に)壊れた戦闘員を殺すべきでない。この青年を救おう」と死刑にしないよう求めている。同法廷の陪審は女性9人、男性9人。評決は陪審の全会一致。

孤独な帰還兵



シリア・カレッジの帰還兵仲間ら。(写真右から)アマンダ・テイラーさん、キャサリン・モリスさん、テリー・ポイドさん。写真左端はライアン・テイラーさん

学生生活への移行 厳しい現実

昔の自分と違う

全米最多の帰還兵220万人が暮らす米カリフォルニア州。地元のコミュニティ・カレッジ(地域短大)には1万5000人余りの帰還兵が在籍するが、兵士から学生生活への移行は予想以上に厳しい。帰還兵の多くは戦場で武装勢力による手製爆弾(TED)即席爆発装置、攻撃を受け、今も外傷性脳損傷(TBI)や心的外傷後ストレス障害(PTSD)に悩まされている。同州北部の地域短大シエラ・カレッジに通う帰還兵3人と、学生の相談員を務める元海兵隊員、キャサリン・モリスさん(47)に現状を聞いた。

◆モリス TBIやPTSDを抱える帰還兵は頭痛や不眠、健忘や精神不安の症状が強く、授業でも集中力がもたず、ドロップアウトしやすい。

◆ポイド 退役軍人省の医療や奨学金を受けるには膨大な書類を申請しなければならぬ。モリスの支援で何とかできたが、少しでも間違えると申請が通らな

PTSDで勉強続かず/取り残される気分

◆元米海兵隊員テリー・ポイド(29) 軍の奨学金をもらったためにアフガニスタン・イラク両戦争に従軍した。IED攻撃を受けて帰還後、頭痛や吐き気、めまいに悩まされた。地元イリノイ州の退役軍人省病院に行ったが患者が多く、初診までに3カ月かかった。診察は3分ぐらいの間診で、残りは待つ。PTSDと診断された。勉強をしなければと買った薬を飲みながら大学買った薬を飲みながら大学

◆元陸軍女性州兵アマンダ・テイラー(25) (米中) 同省は帰還兵が出した書類を紛失することも多く、事務処理に問題が多い。

◆アマンダ 帰国して以来、自分が昔の自分とまるで変わってしまったと感じる。喪失感が大きく、何をやりたいのかも分からず前に踏み出せない。

◆元陸軍兵ライアン・テイラー(28) 01年からイ

——帰国後の生活は——

ラクに従軍し、途中で除隊を希望したが軍に延期を求められ、延べ6年間駐留した。戦場の危険な状況を何度もくり抜け、責任ある仕事を任されていたが、帰国後はそれを知っている人はいない。あこがれの大学生活だったが、周りは高校を出たばかりの若者ばかりで話が合わない。大学を出て警察官になるつもりだったが、戦場で受けた背中への負傷やPTSDがあり、無理だと言われた。社会にほとんど取り残されていく気分だ。

——将来に対する希望は——

◆モリス 現在の帰還兵への奨学金制度では学費が全額免除され、1カ月約14万円の生活費が3年間支給される。だが体調が悪い帰還兵にとって、治療と役所への手続き、学生生活をうまくこなすのは至難の業だ。米国の大学はリベラル色が強く、私のような帰還兵の相談員を置いている例は少ない。「違法なイラク戦争に従軍した」と露骨に帰還兵を批判する教授もいる。帰還兵は孤独になりがちだ。学内に全米でも珍しい帰還兵の交流センターを作るつもりだ。(敬称略)